

特別
ル 3
3616
2



特
門 3
號 3616
巻 2

天明三年卯冬

東行 独旅

六十吟

出羽 春帰

五十七吟

辰春 出羽

廿二吟

市行 日光廻

六十七吟

出羽 帰復

四十八吟

出羽 已秋 已春 已夏 已秋

六十三吟

天明五年己秋八月

東行 上下

三十七吟

出羽 冬春

廿七吟

大山 駈迫 猿立

三十八吟

東行 會津 迫

四十六吟

天明六年 午初秋

帰々 木曾

十八吟

惣計 九四百八十一吟

文化九年 申三月 改 七十歳 壹仙

紀行

天明三年の年やわたり月平の
 ちり上羽の書物と信之を邪
 小島に海を渡るのいふも
 一入
 旅の未はしらけ力も七折
 丁世おと事あるま妙は信之

中

心

心



ありしころきよき山にゆきかきしを
 境木麻上鎮のふもとにありし
 仙外川のほとりにありし
 湯殿山のふもとにありし
 月山のふもとにありし
 古口のふもとにありし
 庄内鎮のふもとにありし
 境木麻上鎮のふもとにありし
 仙外川のほとりにありし
 湯殿山のふもとにありし
 月山のふもとにありし
 古口のふもとにありし
 庄内鎮のふもとにありし
 境木麻上鎮のふもとにありし

おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ

せしむるはなほ

白糸の流るる

かきとていふはなほ

おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ

おのゝとていふはなほ

おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ

おのゝとていふはなほ

おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ

おのゝとていふはなほ

おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ
おのゝとていふはなほ
たかきとていふはなほ

ちかき葉のしづかき老ふらあひり
てしよよしゆの作るるも
ふらふらふらふらふらふらふら

ちかき葉のしづかき老ふらあひり
てしよよしゆの作るるも
ふらふらふらふらふらふらふら

ちかき葉のしづかき老ふらあひり
てしよよしゆの作るるも
ふらふらふらふらふらふらふら

ちかき葉のしづかき老ふらあひり
てしよよしゆの作るるも
ふらふらふらふらふらふらふら

ちかき葉のしづかき老ふらあひり
てしよよしゆの作るるも
ふらふらふらふらふらふらふら

ちかき葉のしづかき老ふらあひり
てしよよしゆの作るるも
ふらふらふらふらふらふらふら

ちかき葉のしづかき老ふらあひり
てしよよしゆの作るるも
ふらふらふらふらふらふらふら

ちかき葉のしづかき老ふらあひり
てしよよしゆの作るるも
ふらふらふらふらふらふらふら

ちかき葉のしづかき老ふらあひり
てしよよしゆの作るるも
ふらふらふらふらふらふらふら

ちかき葉のしづかき老ふらあひり
てしよよしゆの作るるも
ふらふらふらふらふらふらふら



山とてはたけと改められたる
 山の内にはいづれも松の
 木ありてはたけの目には
 けしきも松のたけのあり
 ちかきとていふはたけを
 まかすなり

山はたけと改められたる

あはれものこころのさかすか
涙のこころのさかすか
いふことなきことなき
あはれものこころのさかすか

あはれものこころのさかすか
あはれものこころのさかすか
あはれものこころのさかすか
あはれものこころのさかすか

あはれものこころのさかすか
あはれものこころのさかすか
あはれものこころのさかすか
あはれものこころのさかすか

あはれものこころのさかすか
あはれものこころのさかすか
あはれものこころのさかすか
あはれものこころのさかすか



あはれものこころのさかすか
あはれものこころのさかすか
あはれものこころのさかすか
あはれものこころのさかすか


~~~~~ 林の傍に

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~ 林の傍に

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~ 林の傍に

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~ 林の傍に

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~ 林の傍に

~~~~~

~~~~~ 林の傍に

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



廿三坂

花々の果とては山ゆかり  
 の風は秋ふしとて一人後の作  
 五の府より目をさす

旅をよめはうれぬや

はなはたの秋はゆき  
 巨寇のたまたまはあつた  
 人の心はよきとては

あはれとては  
 日暮らとては

はなはたの秋はゆき

田舎と海へ

後ハヤ水と解の物いふ

空のやまへ

そよよらるはなはふもやぶらこい

さうさうさうさうさうさうさう

あーららららららららららら

うらららららららららららら

いーあーあーあーあーあーあー

いーあーあーあーあーあーあー

さうさうさうさうさうさうさう

戸根川のさうさう

藤井川の人々へ

の風がはらりと吹く

本所の吹おしーこやの風がはら

とらまめたりと袖をのぼる

ゆらゆらと風がはらりと吹く

んーんーんーんーんーんーんー

うーうーうーうーうーうーうー

うーうーうーうーうーうーうー

後水は夜もやぶらこい

百カアとの風がはらりと吹く

十カアとの風がはらりと吹く

八カアとの風がはらりと吹く

六カアとの風がはらりと吹く

四カアとの風がはらりと吹く

れーれーれーれーれーれーれー

江崎より〜信丸の〜  
ついでに〜の中〜  
船場の市〜  
運河〜  
〜の橋〜  
河の橋〜  
河の橋〜

ま〜河〜

流〜  
く〜

人〜

父〜

中〜

長崎

二日〜

人日〜

公報〜

印〜

門〜

橋〜

海〜

海〜

Handwritten text, possibly a title or section header.

Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

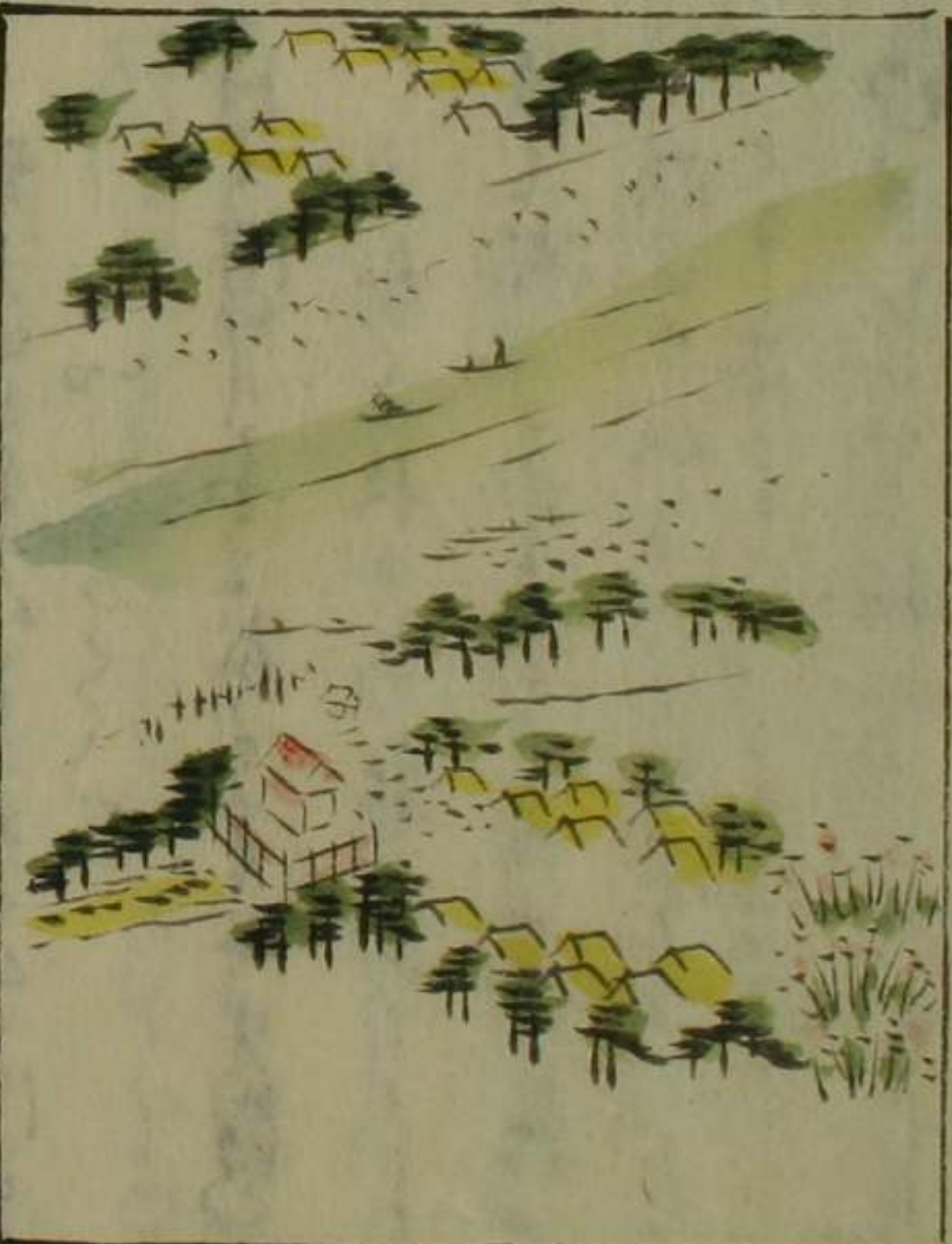
Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

Handwritten text, possibly a list or descriptive notes.

戸根川

水々々々々々々々々々々々々々々々々々々々



途中

山々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

古河

山々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

山

山々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

山

山々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

山

山々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

山々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

山

山々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

宿 石久保



深淵の底に日影の残るる

途中

旅人の心をよそよそしく  
影や

まはらわはのさうらうらうら  
日影の残りさめぬ 影はま物さ  
い 澄々く 無きものさうら  
おとりのさうらうらうら  
のさうらうらうらうらうら  
あやうらうらうらうらうら  
さうらうら  
まはらわのさうらうら  
まはらわのさうらうらうらうら  
あやうらうらうらうらうら



山崎の山

備前守の山崎の山

大田守の山崎の山

西守の山崎の山

山崎の山

山崎の山

山崎の山

山崎の山

山崎の山

奉納 山崎の山

山崎の山

白川 冥

冥 奥 列 境

関 明 神 二 社

白 坂 三 丁 東



茶店

山崎の山

山崎の山

山崎の山





若しやそらそらと海に

揺るゝやそらそらとては

途中

善哉善哉と云ふはなほ

何もの事かと云ふは

此の世にありては

事なるべしと云ふは

半は成る事なるべしと

云ふは

事なるべしと云ふは

事なるべしと云ふは

事なるべしと云ふは

事なるべしと云ふは

鳥魚二條

〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ

〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ

〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ

〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ

〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ

〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ

〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ

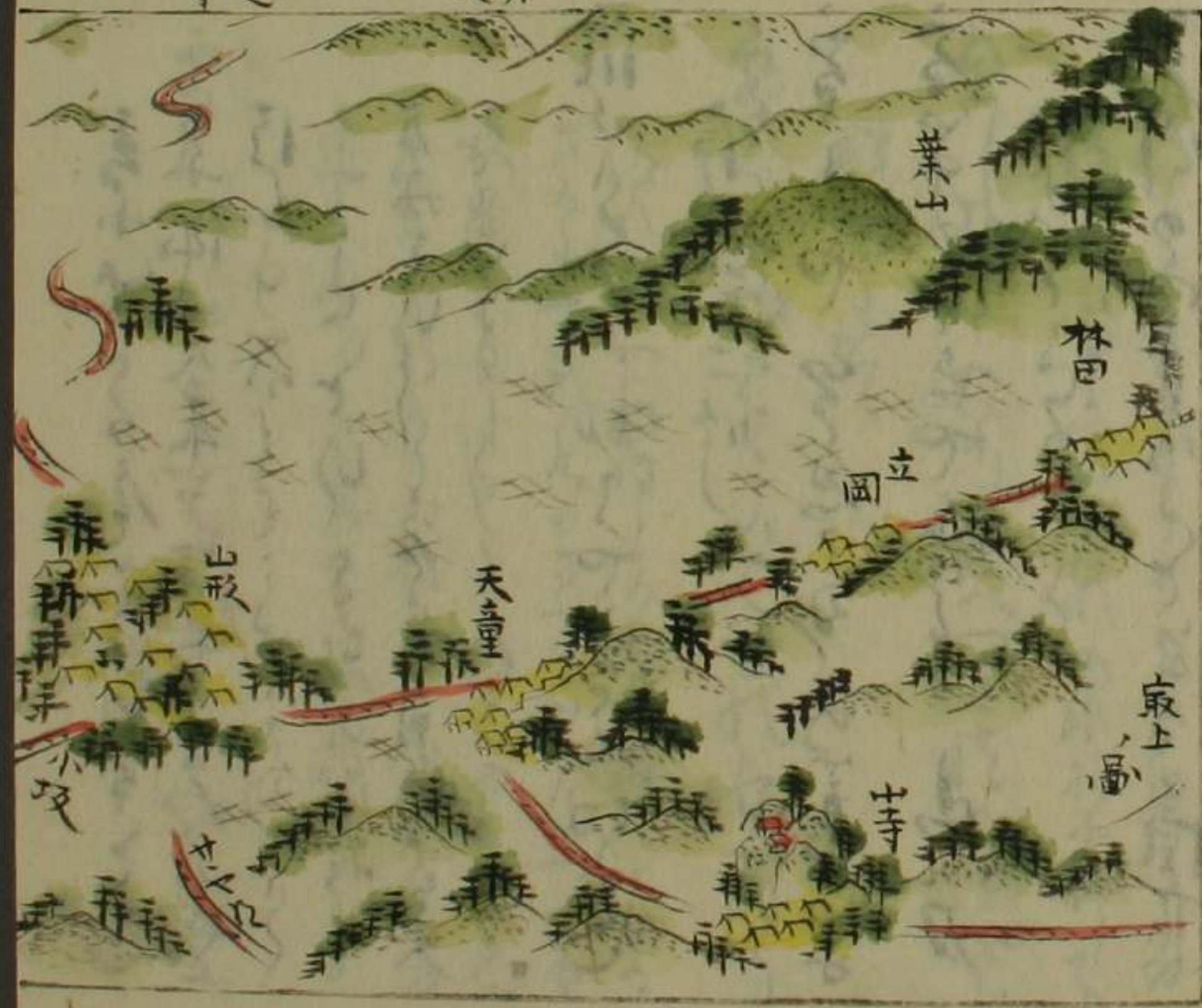
〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ

〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ

〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ

〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ

月山 湯殿山 本道寺



山中や冠氷の鮫くも

六田のふみゆりゆり名あり  
 三田川の冠氷ゆりゆり  
 八つたてゆりゆり  
 山中や冠氷の鮫くも  
 市の中はゆりゆり  
 尾巻のゆりゆり  
 月山のゆりゆり

山歌二吟

高小舟の尾を引のりて  
る小舟、其岸より一のちりて  
はるるの舟、其の舟に  
りて、其の舟に、其の舟に  
りて、其の舟に、其の舟に

流るる舟、其の舟に、其の舟に

舟の舟、其の舟に、其の舟に  
舟の舟、其の舟に、其の舟に

舟の舟、其の舟に、其の舟に  
舟の舟、其の舟に、其の舟に

舟の舟、其の舟に、其の舟に  
舟の舟、其の舟に、其の舟に  
舟の舟、其の舟に、其の舟に

舟の舟、其の舟に、其の舟に  
舟の舟、其の舟に、其の舟に  
舟の舟、其の舟に、其の舟に

舟の舟、其の舟に、其の舟に



右東都上下紀行  
三

右東都上下紀行  
三

右東都上下紀行  
三

右東都上下紀行  
三

右東都上下紀行  
三

右東都上下紀行

辰春

辰春  
辰春辰春辰春

辰春辰春辰春

辰春辰春辰春

辰春辰春辰春

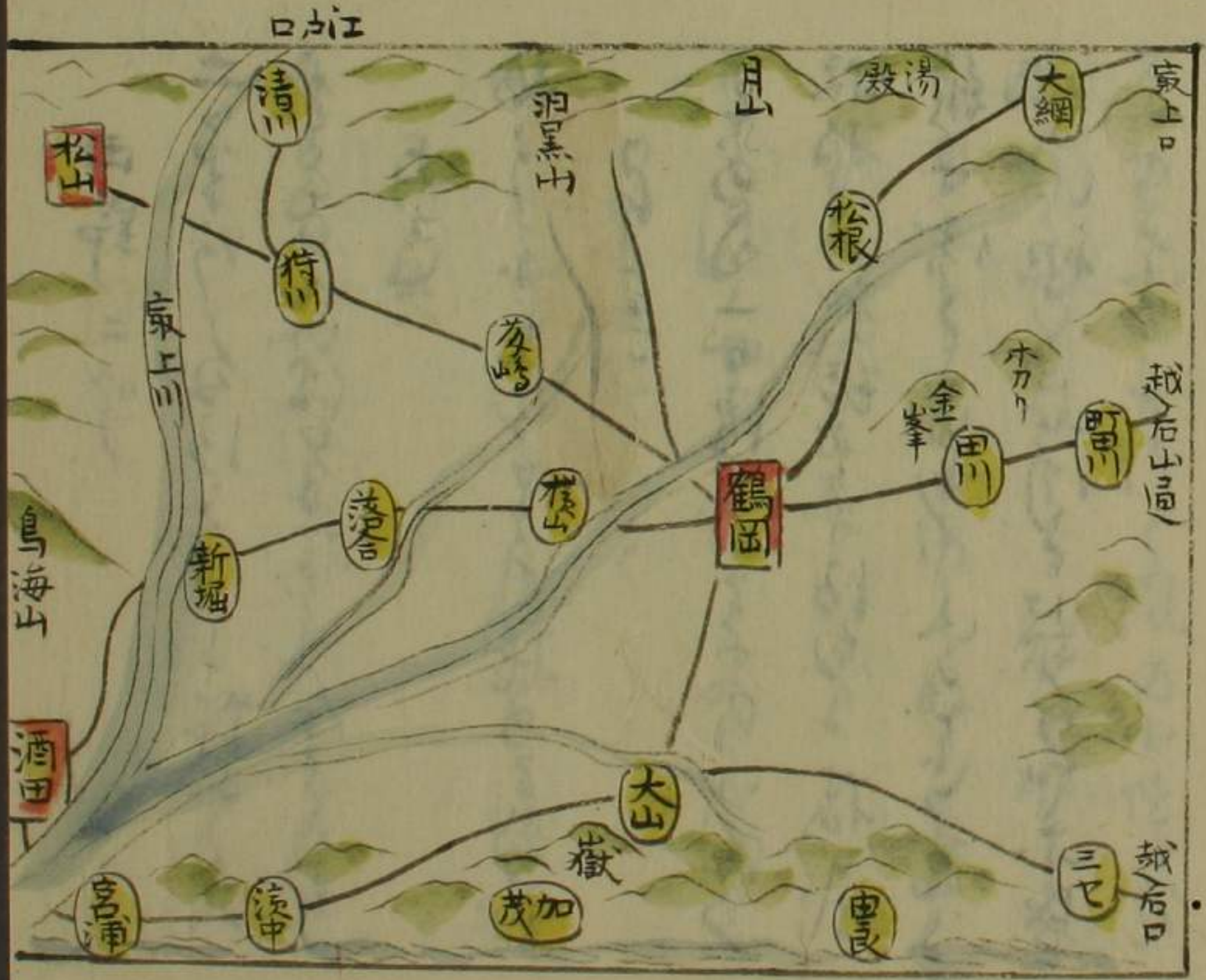
辰春辰春辰春

辰春辰春辰春

辰春辰春辰春

辰春辰春辰春

石



越后山崎  
 大田  
 新堀  
 鶴岡  
 大田  
 三ツ  
 江口

越后山崎  
 大田  
 新堀  
 鶴岡  
 大田  
 三ツ  
 江口

回野ニ於テ

上ノ山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ

上ノ

山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ

山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ

山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ  
山ノ下ニ於テ



車行の別

左の行の... 係り... 車... 係り... 車...

後... 係り... 車... 係り... 車...

大... 係り... 車... 係り... 車...

ら... 係り... 車... 係り... 車...

あ... 係り... 車... 係り... 車...

夜... 係り... 車... 係り... 車... 係り... 車... 係り... 車...

か... 係り... 車... 係り... 車...

あ... 係り... 車... 係り... 車...

あ... 係り... 車... 係り... 車...

あ... 係り... 車... 係り... 車...

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive writing.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive writing.

冊下給の書は、はるかに

冊下の書

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書

うらやまの書は、はるかに

うらやま

うらやまの書は、はるかに

うらやまの書は、はるかに



中坂の侍の歌

うらぬのまもりも中坂丸垣とて

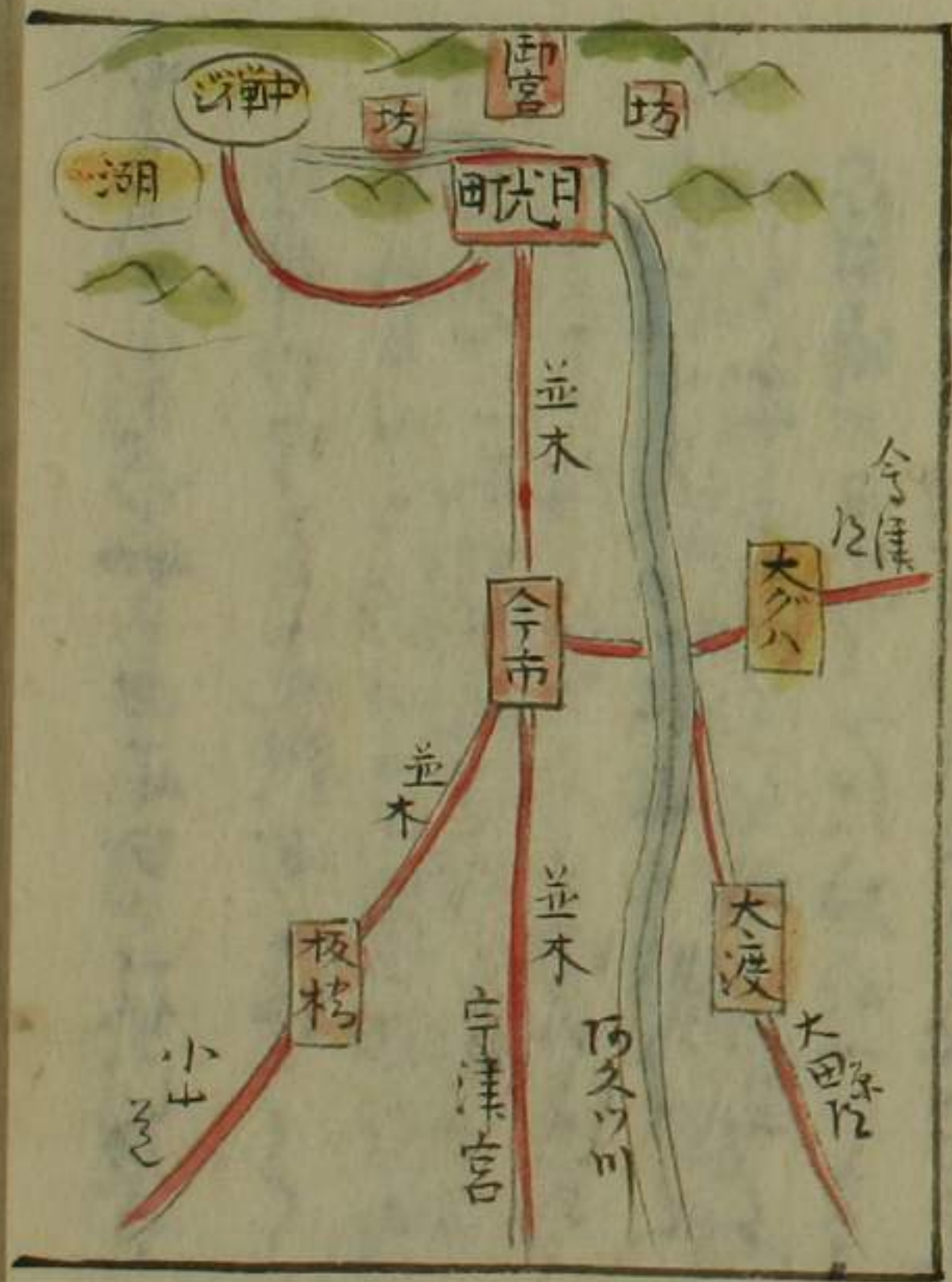
（中坂丸垣の日記）

おもしろいことばかりかきかへて  
まのぼろもまのぼろのまのぼろ  
浮世のあはれは人のあはれ  
はるかにわたるはるかにわたる  
おもしろいことばかりかきかへて  
まのぼろもまのぼろのまのぼろ  
浮世のあはれは人のあはれ  
はるかにわたるはるかにわたる  
おもしろいことばかりかきかへて  
まのぼろもまのぼろのまのぼろ  
浮世のあはれは人のあはれ  
はるかにわたるはるかにわたる

うらぬのまもりも中坂丸垣とて  
おもしろいことばかりかきかへて  
まのぼろもまのぼろのまのぼろ  
浮世のあはれは人のあはれ  
はるかにわたるはるかにわたる

（中坂丸垣の日記）

おもしろいことばかりかきかへて  
まのぼろもまのぼろのまのぼろ  
浮世のあはれは人のあはれ  
はるかにわたるはるかにわたる  
おもしろいことばかりかきかへて  
まのぼろもまのぼろのまのぼろ  
浮世のあはれは人のあはれ  
はるかにわたるはるかにわたる



今市  
 大渡  
 大田  
 板橋  
 小川  
 庄津宮  
 御堂  
 町伏  
 湖

途中

新...  
 今市  
 大渡  
 大田  
 板橋  
 小川  
 庄津宮  
 御堂  
 町伏  
 湖



桐のあや  
余中

形あはれしほやのうたはら

淀みしるや清き水はた

と根の境とまじり

しほのあやとまじり

余中

清き水はたあやのうたは

あやのうたは

しほのあやとまじり

あやのうたはあやのうたは

あやのうたはあやのうたは

あやのうたはあやのうたは  
あやのうたはあやのうたは

あやのうたはあやのうたは

あやのうたはあやのうたは

あやのうたはあやのうたは

あやのうたはあやのうたは

余中

あやのうたはあやのうたは

あやのうたはあやのうたは

あやのうたはあやのうたは



ちあひらけりてお年ごころ

ふちあひらけりてお年ごころ

子物も開てお年ごころ

園とてお年ごころ

木敷もか

かしらわお年ごころ

角田川

氷清しお年ごころ

中海御涼三時

涼風お年ごころ

お年ごころ

### 京都御所

お年ごころ

お年ごころ

お年ごころ

お年ごころ

お年ごころ

お年ごころ

お年ごころ

お年ごころ

お年ごころ

お年ごころ

定人のついでに

千位の子也

お多や工用のあつと多入の

くらゐの力か、祐登の孫の御

月か入るに、お世の御

千位の子也

お多や工用のあつと多入の

中

お多や工用のあつと多入の

途甲

お多や工用のあつと多入の

石橋のゆり

屋づくの國のまや

ゆ久保川

お多や工用のあつと多入の

房の御

お多や工用のあつと多入の

途甲

お多や工用のあつと多入の

お多や工用のあつと多入の

お多や工用のあつと多入の

お多や工用のあつと多入の

金甲

初しとやあはれしはなれり

大田原とてしはれり

谷戸とてしはれり

たふらぬ

とてしはれり

たふらぬ

たふらぬ

たふらぬ

たふらぬ

たふらぬ

たふらぬ

公成やあはれしはなれり  
かきとてしはれり

たふらぬ

一日のあはれしはなれり

たふらぬ

たふらぬ

たふらぬ

たふらぬ

たふらぬ

たふらぬ

年甲

回廊の文をぬくくくくくくく

ゆかど川

屋敷のまじりて照らすくくくく

幸別つ旅くくくくくくく

風つわくくくくくくくくく

人甲

行つてくくくくくくくくく

まじりてくくくくくくくく

十甲

まじりてくくくくくくくく

北甲

鬼百八くくくくくくく

くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

人甲

けしんれあくくくくくく

山甲

海あくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

たゆみくくくくくくくく

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

Handwritten text, possibly a section header or a specific note, located in the middle of the page.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script, continuing from the previous page.



外川

仙人溪

仙人溪

久遠の昔の事か昔の事か

今も

水の流れは昔の如し

今も昔も変わらない

昔の川は海まで流れて  
 今も流れて流れて  
 昔の川は海まで流れて  
 今も流れて流れて  
 昔の川は海まで流れて  
 今も流れて流れて  
 昔の川は海まで流れて  
 今も流れて流れて

又も昔の川は海まで流れて

石川行上下

天明四年辰水々々廿日









けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり

けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり  
けりきりきりきりきりきり

いづれかあつちとあつちと

天の川の平庭をわたりて  
あつちとあつちとあつちと

品曲の秋

八月やせぬおぼえの田の  
あつちとあつちとあつちと  
秋のあつちとあつちとあつちと

田路

八月のあつちとあつちとあつちと

心集

薄のさかすかすの秋のそら

あふくさくさくしづかき

あふくさくさくしづかき

探鳥

月影や竹の影をいづこ

九月よりらるる

あふくさくさくしづかき

初み

あふくさくさくしづかき

あふくさくさくしづかき

芭蕉道心 独哥仙在余奥に出

あふくさくさくしづかき

探鳥

あふくさくさくしづかき

上王社十夜

あふくさくさくしづかき

探鳥

あふくさくさくしづかき

探鳥

初めに心をなすは二つ

報答の心と人の心

いふ事やうに思ふ事やうに

いふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

思ふ事やうに思ふ事やうに

東京府立第一中学校

第一分科

漢文

第一分科

漢文

第一分科

漢文

第一分科

漢文

第一分科

漢文

第一分科

漢文

第一分科

東京府立第一中学校

第一分科

漢文

第一分科

漢文

第一分科

漢文

第一分科

漢文

第一分科

漢文

第一分科

漢文

第一分科

書

書ありしはこれなり

書ありしはこれなり

書ありしはこれなり

書

書ありしはこれなり

書ありしはこれなり

書ありしはこれなり

書ありしはこれなり

書ありしはこれなり

上

書ありしはこれなり

書ありしはこれなり

書

書ありしはこれなり

書ありしはこれなり

書ありしはこれなり

三

書ありしはこれなり

已初復

控名(二時)

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

田原

あつ〜何のよきし〜

日原

土橋の涼〜

貴う早〜

枯き〜

十の四何涼〜

人の傳〜

室長〜

ま〜

昂真

や〜

之秋

秋〜

心

心〜

別茂

名〜

い〜

か〜

車行

中秋来の八日車が遠くへ

影をこぼして海の水を

白く染めて

秋の夜の静けさ

途中

たゞこぼれおぼろげな

海がささる北の空

のちかちか

と

くつろぎの秋の夜

を

ながめ

途中

涼やかな秋の夜

を

ながめ

を

ながめ

を

途中

11

11

ふふわれとてはしのつらむらむ
今逢中

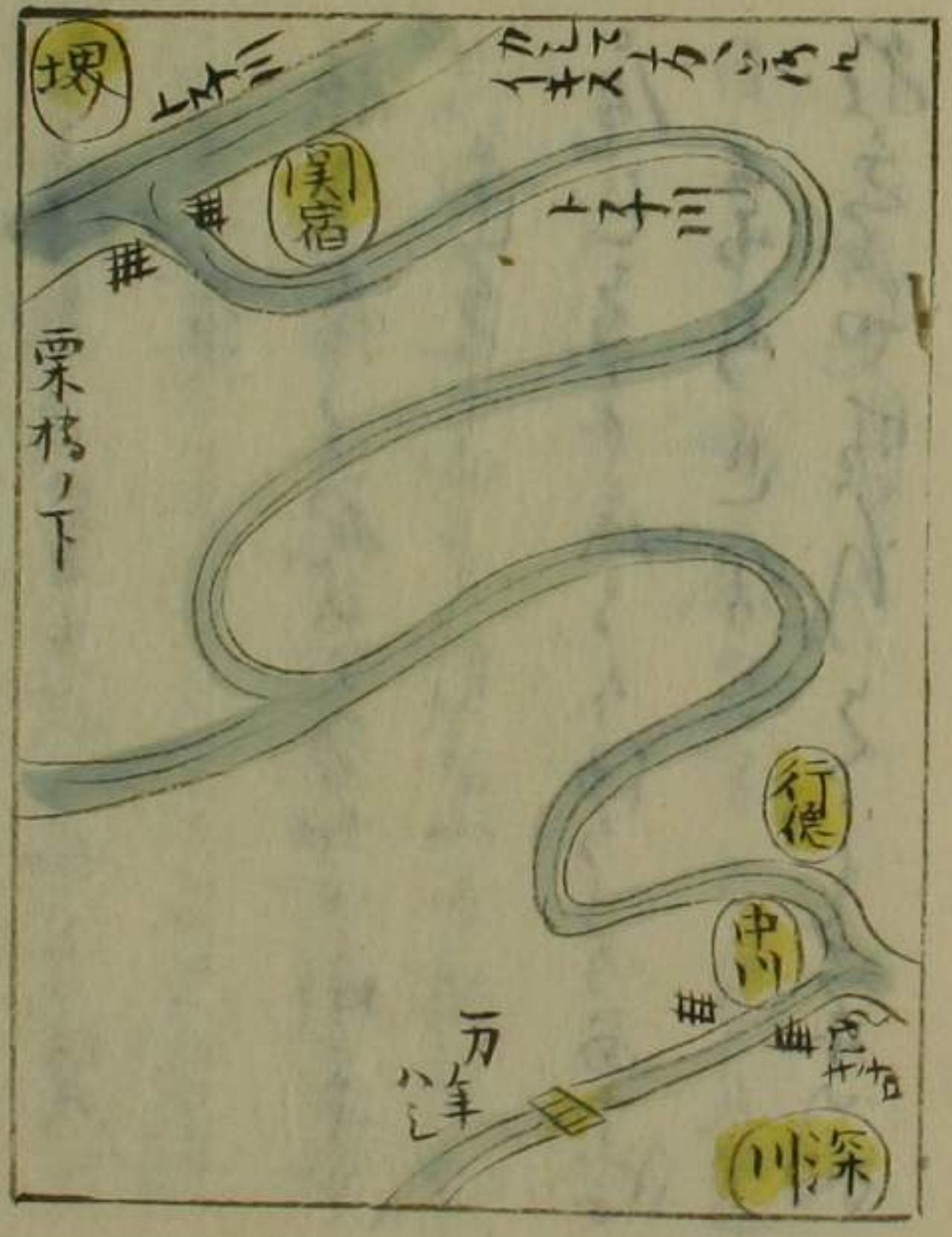
秋所 舟は海よりあつはるむく
まの

舟をこころんこころん乃はらむ
ふねと海つて

何ふふはは目ぢぢし果めさる
ふねととととと梅のふは中

十りこころんこころんあはらむ
まをこころんこころんあはらむ

昔ふらぬ船はさるふらぬ船は



栗の甘りは秋落とる舟は

ふねと海つて

まの

舟をこころんこころん乃はらむ

余中

那〜木流〜

〜火流〜

〜火流〜

〜火流〜

余中

孫子〜

余中

鹿〜

余中

ね〜

七坂中

日〜

余中

花〜

余中

花〜

九月

花〜

余中

湖〜

余中

おれらもいふや一月の暮り
度々ほろり

ぬるくおのちのちのちのち
大石田のちのちのち

昔のちのちのちのちのち
おれもちのちのちのち

けいおのち
おれもちのちのちのち

おれもちのちのちのち
おれもちのちのちのち

おれもちのちのちのち

右東行上下吟

又と奥

おれもちのちのちのち
おれもちのちのちのち
人のくわりのちのちのち

花重亭探歌

おれもちのちのちのち

余中

おれもちのちのちのち

しつるやほらわらわの梅の文

時多思ふこと

ゆきかほらわらわの梅の文

品無

ゆきかほらわらわの梅の文

ゆきかほらわらわの梅の文

ゆきかほらわらわの梅の文

ゆきかほらわらわの梅の文

ゆきかほらわらわの梅の文

ゆきかほらわらわの梅の文

久夜無

ゆきかほらわらわの梅の文

ゆきかほらわらわの梅の文

品無

ゆきかほらわらわの梅の文

丙午春

天の宮
三つおかし

乙丑

ゆきかほらわらわの梅の文

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or scholarly passage. The text is arranged in several lines, with some words appearing to be in a different script or dialect. A small vertical note on the right side of the page reads "大山信教印" (Dai-san Shin-kyō In).

Handwritten text in Arabic script, continuing the passage from the previous page. The text is arranged in several lines, with some words appearing to be in a different script or dialect. A small vertical note on the right side of the page reads "大山信教印" (Dai-san Shin-kyō In).

大いふ告く運るてい比の
 舟作らばはるばるいよいよはれ
 民を安んずるにいとく世の位
 ぬい〜はゆにをくして武蔵
 む〜〜のい〜〜のい〜〜のい
 上あま〜〜のい〜〜のい〜〜のい
 注〜〜のい〜〜のい〜〜のい
 のい〜〜のい〜〜のい〜〜のい



加茂川
 十五里原
 鶴岡



古義のしるし
 今も昔も
 加茂の浦
 舟の往来
 賑わひあり
 今も昔も
 加茂の浦
 舟の往来
 賑わひあり
 今も昔も
 加茂の浦
 舟の往来
 賑わひあり





川
 の
 水
 は
 清
 々
 と
 流
 れ
 ぬ
 べ
 し
 け
 ゝ
 山
 の
 木
 は
 蒼
 々
 と
 茂
 り
 ぬ
 べ
 し
 け
 ゝ
 村
 の
 煙
 は
 白
 々
 と
 立ち
 ぬ
 べ
 し
 け
 ゝ
 舟
 の
 帆
 は
 白
 々
 と
 立ち
 ぬ
 べ
 し
 け
 ゝ
 鳥
 の
 声
 は
 遠
 く
 聞
 け
 ゝ
 海
 の
 波
 は
 白
 々
 と
 立ち
 ぬ
 べ
 し
 け
 ゝ
 象
 河
 の
 水
 は
 清
 々
 と
 流
 れ
 ぬ
 べ
 し
 け
 ゝ

目打山や

花白やん 風さ海力そが

山王神社

白鳥やう坂さみこ子の後

神の浦

かきくや 神を浦のりまの丸

物ほさか

らくくささや 七つれほのそん

八つ町とくニ竹

おきくくさや 者れ物さく

らくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

鯉画亭や

花の後さののりく 西も

さき子の十子お

らくくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

はくくくささや 七つれほのそん

下略

柳屋より後投

いと海老の殻も折れし後投

西田くさくさくさくお堀の池

草のやちやちやちやちやちや

おー切のこわ

ふむ花や春をんをんをん

枝のほろろ

草のよもや水くくく馬くく

大山の橋くくくくくくくく

手取、越さくくくくくくくく

あかりんれれれれれれれれ

仕中、丸通

くくくくくくくくくくくく

おんおん

くくくくくくくくくくくく

おんおんおんおんおんおん

おんおんおんおんおんおん

おんおんおんおんおんおん

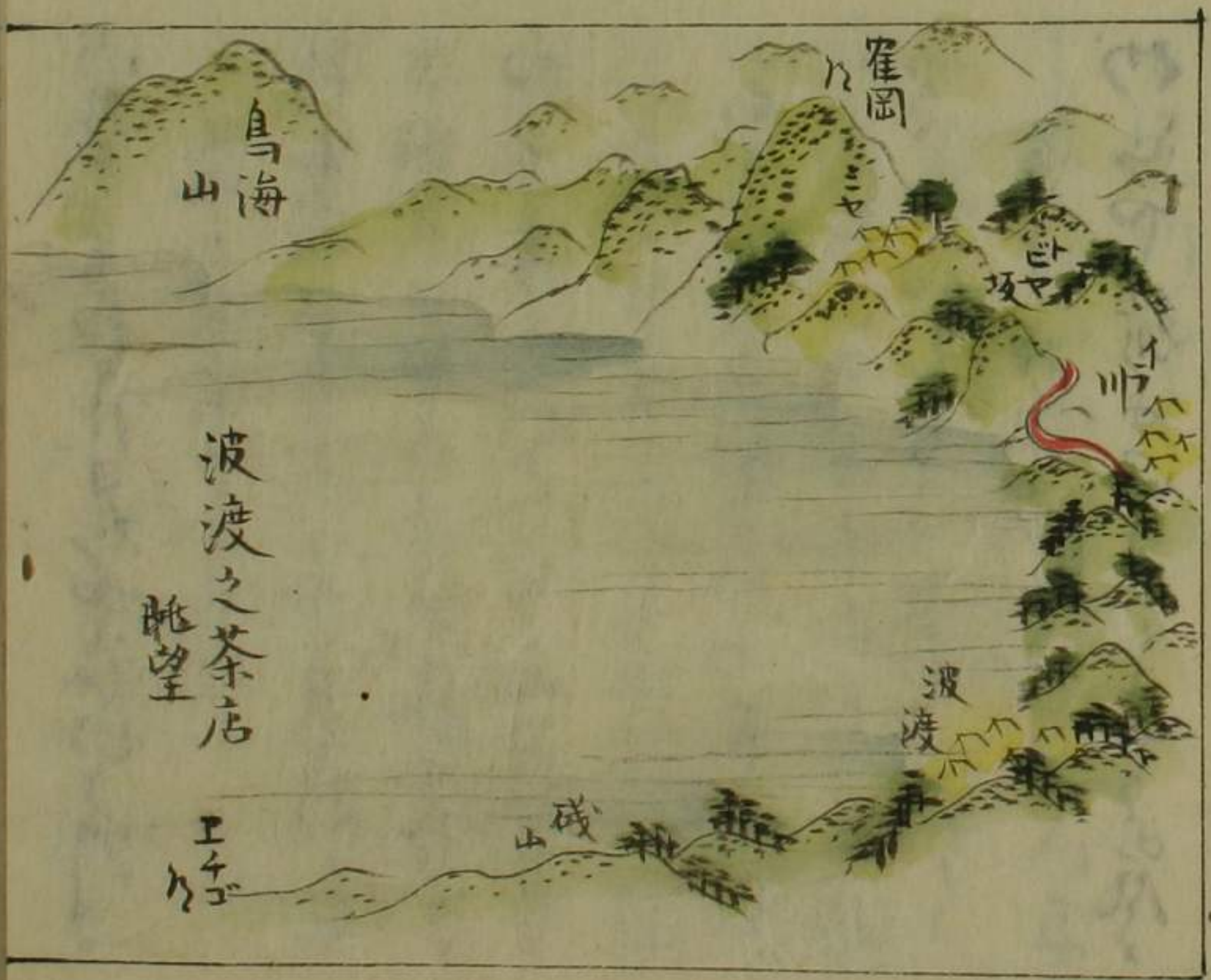
おんおんおんおんおんおん

おんおんおんおんおんおん

くくくくくくくくくくくく

くくく

くくくくくくくくくくくく



波渡の人々も
 卯のまはるも
 山はわ
 河もわ
 余中
 木のまはるも
 山はわ
 波渡のまはるも
 山はわ
 波渡のまはるも
 山はわ

定まらば月見や流るる

流るる

流るるや流るるや流るる

田中の流るるや流るる

舟の流るるや流るる

矢の流るるや流るる

山に流るるや流るる

武部山に流るる

途中に流るる

舟の流るるや流るる

流るる

流るるや流るる

流るる

流るるや流るる

流るる

流るるや流るる

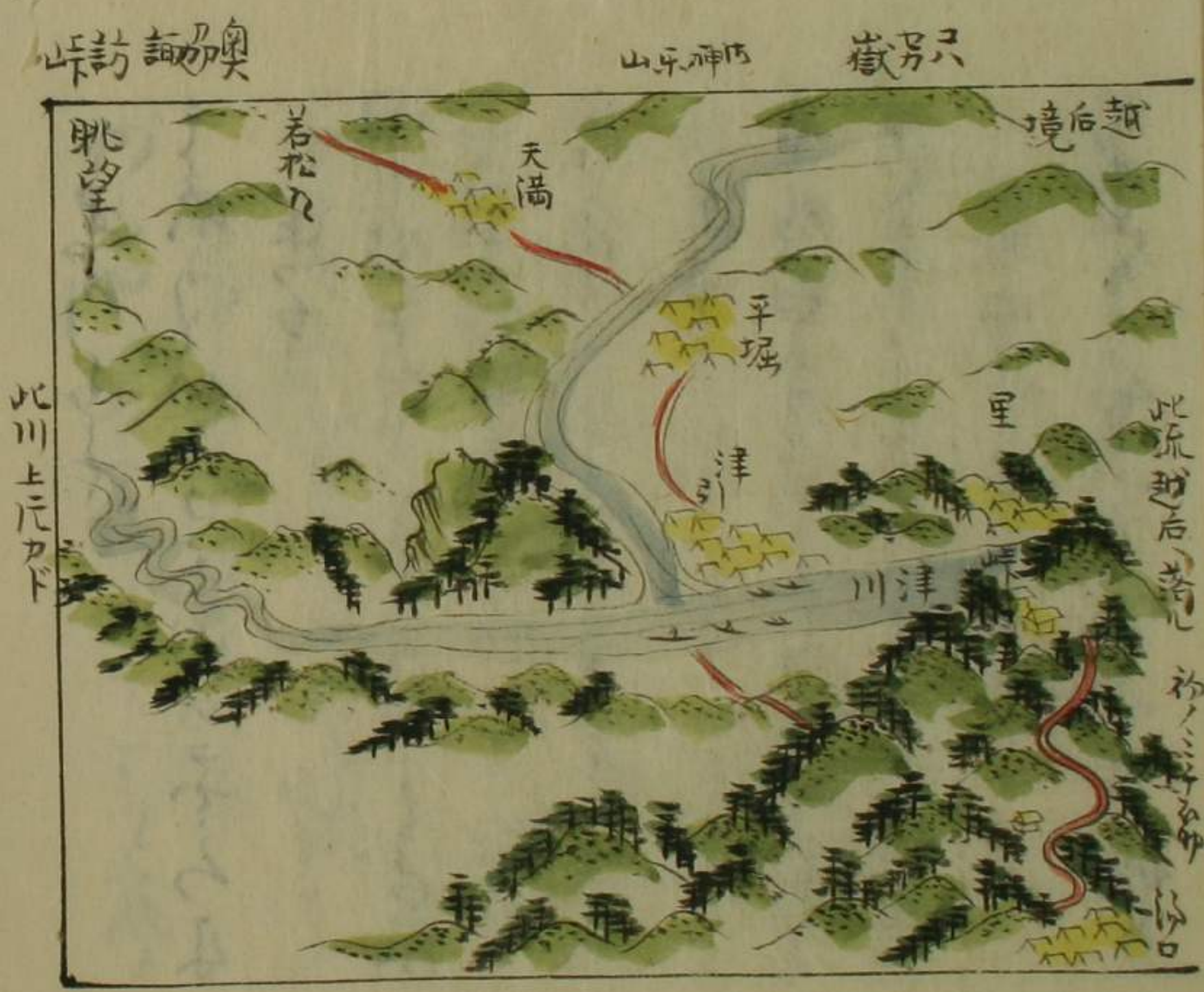
流るる

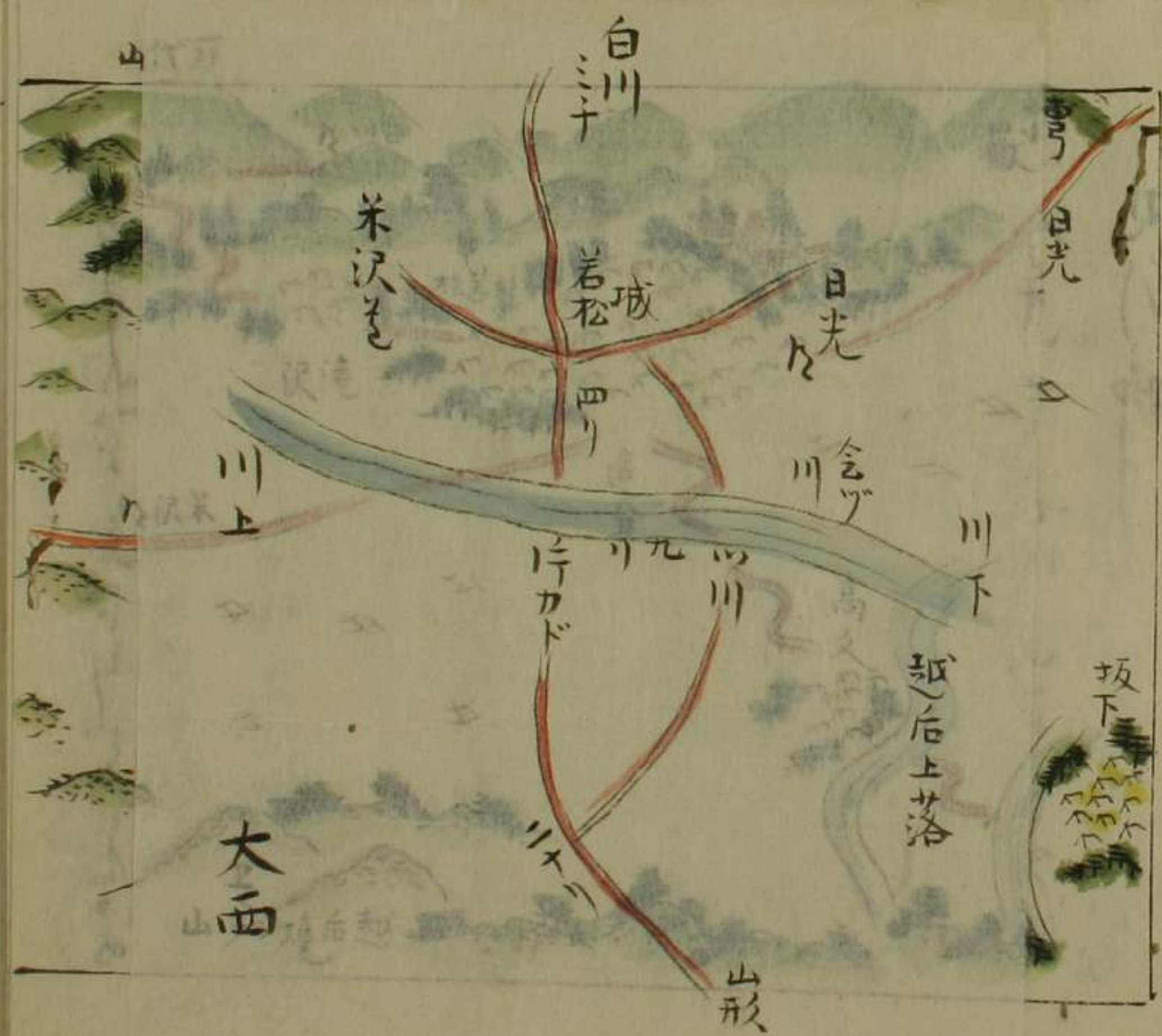
流るるや流るる

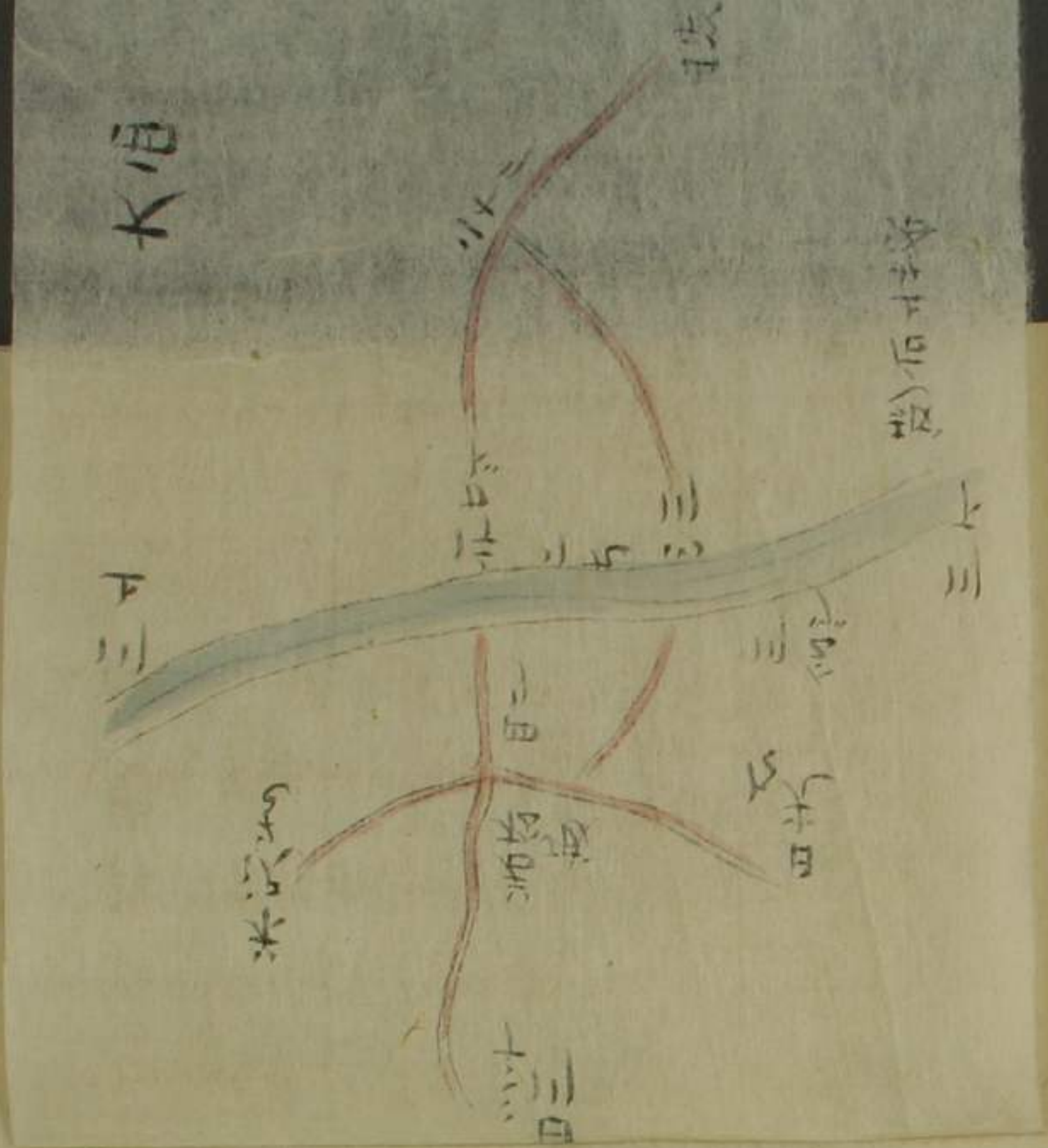
流るる

流るるや流るる

詠訪峠也
 此川上に於て
 車坂あり
 此川上に於て
 詠訪峠也
 此川上に於て
 詠訪峠也







きりぎりすのうたがたてしなほ
度別れをいかにせよとてなほ

度別れをいかにせよとてなほ

ふねの舟とらふ

ふねの舟とらふ

全中

かへりてふとてなほ

かへりてふとてなほ

かへりてふとてなほ

かへりてふとてなほ

かへりてふ

かへりてふとてなほ

かへりてふとてなほ

かへりてふとてなほ

かへりてふとてなほ

全中

かへりてふとてなほ

かへりてふとてなほ

かへりてふとてなほ

かへりてふとてなほ

かへりてふとてなほ

いふのちの流るる水は
しる夏の柳あつて流るる水は
流るる水はしる夏の柳あつて
流るる水はしる夏の柳あつて

夏のおもひ

全中

お茶子のいささし無一風のち

江戸高坂の流るる水は

流るる水はしる夏の柳あつて

流るる水はしる夏の柳あつて

流るる水はしる夏の柳あつて

流るる水はしる夏の柳あつて

奉納山王

あつての流るる水はしる夏の柳あつて

流るる水はしる夏の柳あつて

流るる水はしる夏の柳あつて

流るる水はしる夏の柳あつて

流るる水はしる夏の柳あつて

流るる水はしる夏の柳あつて

流るる水はしる夏の柳あつて

流るる水はしる夏の柳あつて

流るる水はしる夏の柳あつて

流るる水はしる夏の柳あつて



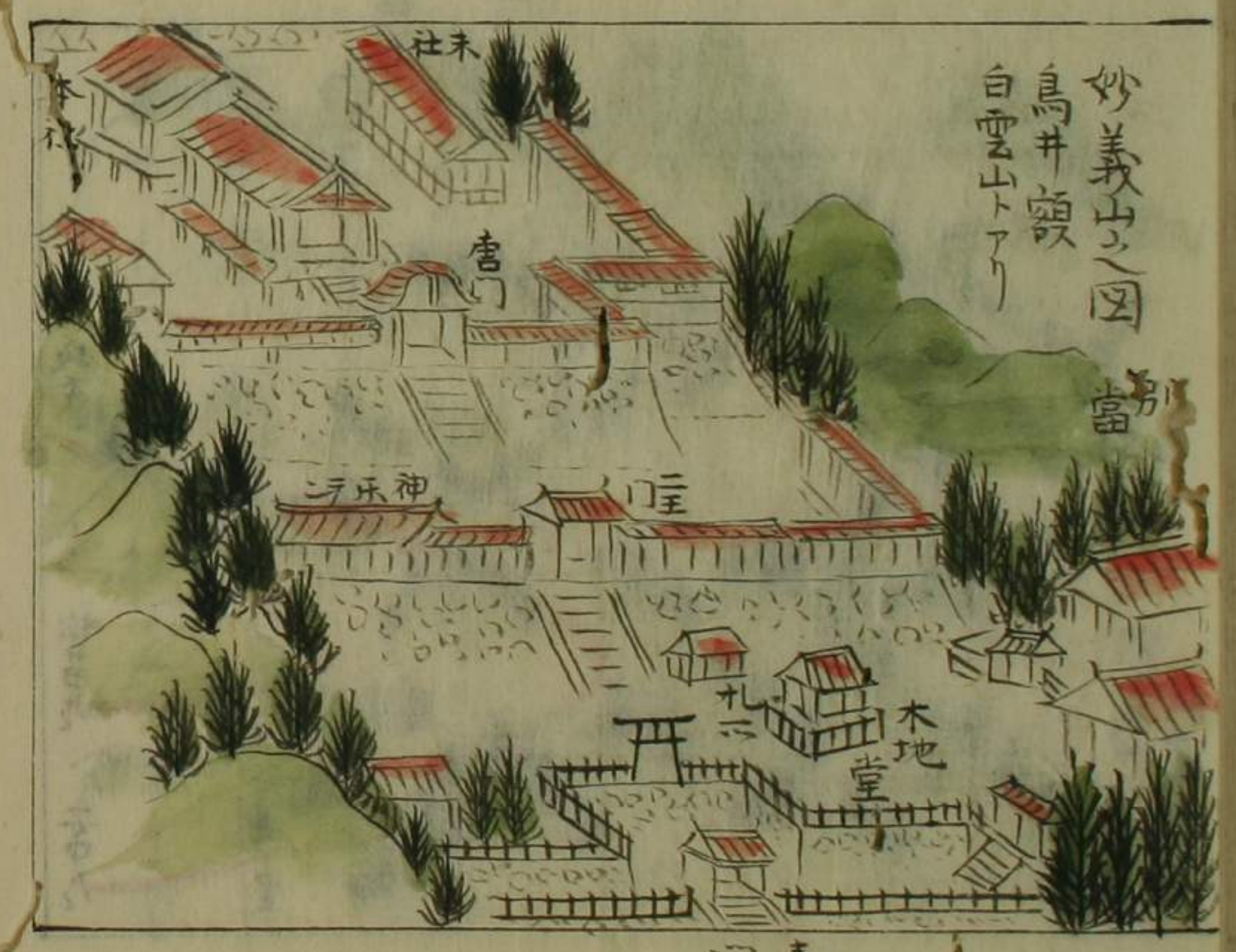
松より秋の夕やけに松の
 虫のしるしは松とてしるし

往きやいしとよのわらわ
 客舎とて二竹

七月の夕やけの
 妙義山

ゆけよ本
 初秋の夕やけの松の
 松の夕やけの松の
 松の夕やけの松の
 松の夕やけの松の
 松の夕やけの松の

妙義山之図
鳥井額
白雲山トアリ



門表

和国の辰小泊りて

七ノヤハ何ノ様ノノ向ニ

和の味と神と

おちりやうけくさうしう一ツ宛

海山ノ山無とさうし

しるし目とまをし 傍に石の

余中

さうぢららるやわあし

さうしれれともうくこま

海行の水

秋風や富士の嶺



桔梗原わ

ゆきあふ山代やるの穂はつと

あるうわ

あつとせしむらさきとよや谷のあ

なほくくのまをんわ

海らあしとせしむらさきとよや谷のあ

甲は川のつとよまをんあつとせしむらさきとよや谷のあ
 信は移しとせしむらさきとよや谷のあ
 いらぬあつとせしむらさきとよや谷のあ
 幸原のあつとせしむらさきとよや谷のあ
 のつとせしむらさきとよや谷のあ
 けつとせしむらさきとよや谷のあ
 井のつとせしむらさきとよや谷のあ
 さのつとせしむらさきとよや谷のあ

そのいひのいふことよて接者
其後ともいふ所ありあまふ人の
ふとらふこといふにふまふふ
まふこといふこといふこといふ
ふとらふこといふこといふこと
か國のふとらふこといふこと
ふとらふこといふこといふこと
ふとらふこといふこといふこと
ふとらふこといふこといふこと
ふとらふこといふこといふこと
ふとらふこといふこといふこと

折々おれ向へて 日れ巻

大井西行塚

まじりていふこといふこといふこと

四津 萱塚

向新と申のいふこといふこと

後居十泊

致性細いものいふこといふこと

いふこといふこといふこと

かこといふこといふこといふこと

右天の三つあつて

日六十年秋近

紀行

余無

哥仙行秋

只ほのまきとこり 秋の
松をわり巻のこころ
おほの月こころと月
こころは河の岸邊を
こころは月と月
秋のまきとこころ
川のおふりも
こころは月と月
秋のまきとこころ

只ほのまきとこり 秋の
松をわり巻のこころ
おほの月こころと月
こころは河の岸邊を
こころは月と月
秋のまきとこころ
川のおふりも
こころは月と月
秋のまきとこころ

いささか其のよもをせしむる
はるかに其のよもをせしむる
いささか其のよもをせしむる
はるかに其のよもをせしむる
いささか其のよもをせしむる
はるかに其のよもをせしむる
いささか其のよもをせしむる
はるかに其のよもをせしむる
いささか其のよもをせしむる
はるかに其のよもをせしむる

いささか其のよもをせしむる

石

天保六年丙午被於合欽舎

文化九年申歲

廿七年三歲
此年首仙七十歳也

